

no.5

CLC からしだね書店便り



5 2021
May

CLC からしだね書店では…

- 1 キリスト教書のほか、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もたくさん揃えたいと思います。
- 2 お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- 3 ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチ等をご提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- 4 コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- 5 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- 6 古書の販売もする予定です。
- 7 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供したいと考えています

「信じてても苦しい人へ」

（中村樸著 いのちのことば社 《税込》1540円）



著者 フランスの哲学者シモーヌ・ヴェイユ
『重力と恩寵』『神を待ち望む』など

読書感想本

4月の新刊、『信じてても苦しい人へ』（中村樸、いのちのことば社）を紹介します。タイトルに「信じてても」とあるように、キリスト教徒として生きる上で経験する色々な悩みや苦しみをどう捉えたらいいのか、ということが書かれている本です。しかし本書はキリスト教徒に限らず、誰もが経験する苦しみ一般に対してどう向き合えばよいのかということを考え直す機会を与えてくれる本として読むこともできます。

この本の著者がユニークなのは、人の苦しみを、取り除くべきものとして捉えていないところです。したがってこの本は苦しみの解決方法を直接的に提示するものではありません。むしろ著者は、その苦しみに留まって、苦しみの中で見えてくるものや聞こえてくる音に注意を向けるよう勧めます。それは苦しみの中でなければ見えないもの、聞こえない音があるからです。著者は言います。「暗闇は、神の放つ一点の光を孤独のうちにしっかりと見つめるためにあります」。

しかし「一点の光」を見出すということは、必ずしも私たちの苦しみが解消することではありません。著者はフランスの哲学者シモーヌ・ヴェイユの次のような言葉を引用します。

もし魂が愛することをやめないならば、その叫びに対する答えではなく、どのような答えよりも無限に意義に満ちた何ものかとして、神の言葉そのものとして、沈黙の声を聞く日が来る。そのときに魂は、この世における神の不在は天にある神のこの世でのひそやかな現存と同一のものだということを知らる。『ヴェイユ著作集2『春秋社』

私たちは暗闇に留まって、それでもなお愛することを止めないならば、「答え」、つまり問題の解決や悩みの解消よりも無限に意義のあるものを見出すことができますと言います。そしてそれははっきりと聞こえる声ではなく「沈黙の声」であり、ありありと見える存在ではなく「ひそやかな現存」なのです。

確かに苦しみや不条理を何かで解消せず、そこに留まり続けるのは大変です。それで人は癒しや安心や納得を求めて様々な

ものにすがります。しかし安易に苦しみを解消し、癒されてしまうと、苦しみを通して見えるはずのものを見過ごしてしまうことにならないでしょうか。それとは反対に、どう頑張っても抜け出せない苦しみに戦い疲れたときに、ふと見える外の景色の美しさに気づいたり、詩や小説の言葉を深く理解できたと感じたりすることはないでしょうか。そこで私たちが見出すのは答えや解決ではありません。しかし答えや解決より根本的なところから、私たちが生きていくことを支えてくれるのは、このような苦しみの中で見える「一点の光」ではないでしょうか。

シモーヌ・ヴェイユは人間の不幸について、手紙の中で次のように書いています。



神の憐れみは不幸そのものの中に輝きます。慰めのない苦しみの奥底で、その中心で輝くのです。人が愛の中に忍耐して、魂が「わが神よ、何故にわれを捨てたまいしか」という叫びを抑えられないところまで落ちていくならば、そして愛することを止めずにこの点にとどまるならば、人はついに何かもう不幸ではないものに触れるのです。それは喜びではなく、喜びにも苦しみにも共通な中心をなす本質であり、本質的な、純粋な、感覚できないものであつて、それが神の愛そのもののなのです。（中略）このような神の現存を知っても慰めにはならず、不幸の恐ろしい苦しみを何もとり除かず、傷ついた魂を癒しはしません。けれどもわたくしたちに対する神の愛がこの苦しみとこの傷の実体そのものであるということが、たしかに知られるのです。わたくしは感謝して、このような神の憐れみのあかしを残すことができたいと思っております。『神を待ちのぞむ』春秋社

私たちはあまり長く苦しみ続けていると、「苦しみがなくならない」ということを苦しむようになります。それは苦しみをただ取り除くべきものと考えているからです。反対にヴェイユは、「神の愛がこの苦しみとこの傷の実体そのもの」であると言います。「感謝して」この苦しみにとどまろうとするのです。ヴェイユの言葉を読むと、自分の苦しみが肯定されているような気がします。そうすると、自分の苦しみに対して優しく接することができるようになります。『信じてても苦しい人へ』も、苦しみがなくならないことに苦しんでいる人や、苦しみを扱いかねる人に向けて書かれています。そして本書で頻繁に引用されているのが、ヴェイユの言葉なのです。ヴェイユの本（『重力と恩寵』『神を待ち望む』など）と併せて読まれることをお勧めします。（書店員C）

第四回：「やる気ないんで」という子どもの関わり

臨床心理士
坂岡 大路

1988年京都府生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。訪問型フリースクールや、中学校、児童フリースクールなどのボランティア経験を経て、現在、札幌市内の児童精神科に勤務。臨床心理士、公認心理師。2019・2021年『成長』(SAGE出版)誌に「16歳で学ぶ教会学校」を連載。

「だるい」「やる気ない」「つかれた」「帰りたい」「ぶっつ」「びみょう」……こういう言葉をぼーんと空中に放られた時、皆さんならどうキャッチしますか。私も職業柄、難しいボールを誰にともなく「投げる」子によく出遭います。それは、だれか特定の相手に言っているというよりも、ただ漠然とした感覚の発露として、つぶやきとして、気持ちを漏らすのです。でも、その子たちは、心のどこかでちよっぴりだけ、「誰か受け止めてくれないかなあ…」と暗に期待しており、同時に、「期待しすぎると受け止めてもらえなかった時に辛くなるから期待しすぎない」ようにして、「誰に言っているわけでもないんだよ」という体でいる。そんな風に、こちらの顔を見ないで、ぼーんと空中に、気持ちを放るのです。

以下で物語るのは、そういう子たちとの出会いをいくつか組み合わせて創ったお話です。

ミサキくんは男子高校生。気持ちの落ち込みが強く、毎日鬱々とした気分になる。何かやりたいし打ち込みたいのに、周りともっと関わっていききたいのに、行動を起こす元気がなかなか出ません。そんな中で、私と面接することになりました。彼はいつも、「自分は何も期待していない」というような諦念然とした雰囲気話し始め、しかし、じつくり聞いていくと、「認めてもらいたい」「気持ちが参み出るような語りを、だんだんとし始めるのです」。

たとえば冬休み直後に会った時は「別に何ごともなかったです」と話し始めます。そこで私は想像力をフル回転させて、思い巡らせるのです。「何ごともない…って、どういう意味だろう。自分が彼の立場だったとして、『何ごともない冬休み』って、どんな感じだろう。暇だろうか。退屈だろうか。穏やかで、平和に過ごしているということでもあるだろうか…」。数秒そんなことを考え、そして言います。「何事もない…うーん、穏やかで、平穩に過ごしている感じ」。

表情を変えずに「そつつすね」と素っ気なく言うミサキくん。私はさらに考えます。「うーん冬休み…。まあ、宿題して…

友達と遊んだり…。おいしいもの食べて…好きな本読んで、テレビ見てのんびり…みたいな」すると、ミサキくんは表情をパッと変え、ニヤリとしつつ言つのです。「あ、そっえば宿題は12月末までに終わらせました」。ここでようやく合点がいきます。「ああ、そのことを認めてほしかったのね。それを言いたかったのね」と。こんな風に言っただけは失礼かもしれませんが、素っ気ない悟り顔の奥に、無邪気な「かわいい」表情が見えてくる。彼の本題はそこなのです。

またある時は、こんな風に話し始めます。「テストが近いけど、やる気ないんで全然勉強してないです」。いつものサラリとした表情。どこを見ているというのでもなく、気持ちをポイ捨てするような、空中に放るような、そんな話しぶりです。私もまた、サラリとした表情でこう答えます。「ほー、全然なんにも勉強してないんだ」。

これはもちろん「真に受けたふり」です。信頼関係ができてくると、こっぴどくちよつとした「ワザ」も、だんだん使いやすくなつてきます。それを聞いて彼はこう答えました。「いや、0.2くらいはしてます(笑)」これは先ほどの自己否定を自ら打ち消したということ、つまり自己肯定です。私は「ほほう、お主やるな」という表情で、さらに突っ込みます。「0.2はやった。どんなことを…?」すると、自分のやっている努力や工夫、強み、認めてもらいたいことをどんどん語り始めます。

ミサキくん「授業中に、どこをどう攻めるか考えておくんです。紙にまとめておいて、直前になったらバツと読むだけ。集中力ないんで」。

私「短期集中型なんだ」。

ミサキくん「そつつすね。そういうタイプだから。俺」。

私「集中が長く続かないってわかってるから、自分に合う方法開発して、やっているんだ」。

ミサキくん「直前に読むだけじゃダメで、事前に『ここここはつながりあるな』とか考えて、つなげておくんです。めんどいですけど」。



私

「事前の土台づくりが大事だと…。めんどくさいなあ、と思いながらもやってるんだ。」

ミサキくん

「いかに効率よくやるか、短い時間で集中してやるかっていうシステムづくりですね。」

私

「自己分析ができていて、自分のやり方をしっかりもっていると。もう方程式はできてるってわけだね。」



誤解のないように付け加えておくと、私は「学校の勉強ができること」や「成績がいいこと」自体に、ほとんど価値を置いていません。私が注目したいのは、「彼が何を大事にしているか」です。彼は、「ほかの何がダメでも、パズルを解くように目の前の問題をシステムチックに解決する自分」にプライドを持っています。効率よく記憶して、ゲームをクリアするように難題を乗り越えられる自分。そこに誇りを持っている。そのことを知っていたからこそ、あえて「全然なんにもしなかっただね」と言ったのです。

この段階では「私が彼をほめること」は、それほど重要ではなくなっていました（それが大事な時期ももちろんありますが）。「坂岡さんにほめられるからやる」というのでは、モチベーションを支援者に依存してしまいます。最初は「ほめられて嬉しいうからやる」でもいいのですが、その次のステップは、「自分にとって誇らしい自分でありたいからやる」なのです。それが、自己承認ということです。

「やる気ないんで」。このセリフを大人相手に言えるというのは、考えてみればなかなかの負けん気の強さではないでしょうか。びっくりされるかもしれませんが、こういう想いを子どもから率直に伝えられると、私は「何とありがたいことか」と思っています。私だったら、「やる気ない」と言ふことすらしないでしょう。黙り込んでうつむいて、何も言わないか、「は」と愛想笑いを浮かべて、一瞬「やる気のあるふり」をしてごまかし、「わかってねえな」と鼻で笑って終わりです。「うつせえわ」という曲が流行っているそうですが、一番怖いのは「うつせえわ」とすら言ってももらえなくなることだと思っています。」や

る気ないんで」とすら言われなくなる時。その時こそ、「大人が子どもから完全に見放された時」なのです。私は「やる気ないんで」と言ふことのできる彼のプライド、負けん気の強さに賭けてみたくなりました。そして、彼は私の賭けに乗ってくれたのです。

そのうち、彼は「好きなゲームのサークルを立ち上げる」と言い始め、「特に話すことなくたからもういいっす」とあっさり去っていきました。

「誇り」とか「プライド」という言葉は、キリスト教の世界ではあまり好ましい扱いをされていない気がします。しかし、私はこう考えています。「誇り」と「奢り」はちがうと。「奢り」は等身大の自分を認められない結果の、不健全な反動であり、「背伸び」です。一方で、健全な「誇り」は、人間の生にとって必要不可欠である。私はそう思っているのです。「マタイによる福音書」には、こんなフレーズが出てきます。



「隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであらう。」（6章4節）

これが、私の考える「誇り」のイメージです。私達のある行為は、いつでも誰かに「見てもらえる」わけではありません。ほめてもらえることが保証されているわけでも、努力が必ず結果となって報われるわけでもない。そんな保証はないのです。であれば、どうするか。自分にとって大事なことを思い定め、選び、行動する。後悔のないよう、選択した価値を歩む。結果がどうであれ、そんな自分を誇らしく思うーそれこそが、人間的な「誇り」であり、「自己承認」だと思ふのです。

そして、キリスト者は「自己承認」にもう一つ重要なエッセンスを付け加えます。「神様が見てくださっている。他の誰が見ていなくても、神様は私のことを誇りに思ってくださいっている」。これが、キリスト者の「誇り」です。

そう、「隠れたことを見る神」が、私達の神なのです。そんな神の子である私たちは、神の眼差しを反映できるはずで、リストの点数や、きらびやかな結果じゃ測れない、あなたの生き様を、存在を見ているよ、と。

からしだね館のひびくま —こころ病む人の支援—



4月号では、こころの病によって、出産直後から自分の娘と離れ離れになってしまったAさんについてのストーリーを紹介しました。我が子を育てられない自分（自分への信頼の喪失）、赤ちゃんのことや今後の生活について、何も真実を教えてくれない周囲の人たち（他者への信頼の喪失）、自分を雇ってくれる職場なんてあるのだろうか（社会への信頼の喪失）、そんな喪失の中にいるAさんと、配食サービスで高齢のお客様にお弁当をお届けすることになりました。

「自身の喪失に気づくとき」

就労支援をする私たちとしては、笑顔で優しい口調でお弁当を手渡してほしかったのですが、それを指摘するとAさんは「きちんとやっているし、できている。」とますます表情をかたくして、厳しい口調になってしまいます。押し問答の日々が続きました。お金を払ってお弁当を購入してくださっている方への接客としては、どうしてもOKを出すわけにはいきません。

苦肉の策として、障害者職業センターで職業適性評価（障害のある方がどんな仕事に向いているのか、仕事をするための力がどれくらいいつているのかを知るための検査）を受けてみないか、彼女に提案しました。彼女は「受けたい！」と即答でした。すぐに日程を調整し、検査を受け、結果を聞きに行くことになりました。私も同行するようにと言われ、彼女と一緒に評価を聞きに行きました。

結果はとても厳しいものでした。「私、あかんやん。自分の思っているようには仕事できてへんかったんや…」私とのやりとりでは反発してばかりの彼女が、第3者の評価には肩を落しうなだれています。そんな彼女を見ると（自分でも意外でしたが）私まで悲しくなりました。二人でうなだれるように、からしだねに帰ってきたのを覚えています。

「福祉の支援を卒業する」

翌日、彼女は、からしだねに来て「できていないことをどんどん指摘してほしい」と言いました。それから、彼女

は変わりました。彼女なりに精いっぱい、自分の課題に取り組みました。鏡でスマイルの練習をするようになりました。眉間にしわがいついていないか、やさしい言葉遣いができているか、周囲に「笑顔できてる？言葉きつくない？」と確認するようにになりました。その変化に、周囲は驚きました。

彼女の変化はそれだけに留まりませんでした。からしだねの作業を続けながら、定時制高校を受験し、入学したのです。苦労しましたが、無遅刻無欠席の優良生徒として卒業しました。入学した理由は、離れて暮らす娘が大きくなった時、母親として少しでも知識を身につけ、勉強を教えてあげたい、というものでした。

卒業後、彼女は、娘の暮らす地域に引っ越しをしました。いつでも自分のところに遊びに来ることができるよう、との理由でした。新しい人生を自分の力で歩み出した彼女は、からしだねでの「福祉の支援」も卒業しました。

「新しい出会い」

新しい地に引っ越し、何年がたったでしょうか。ある日、彼女から電話がかかってきました。「からしだねのクリスマス会で聞いたイエス様のことをもっと知りたい」「教会に行ってみたい、紹介してくれないか」とのことでした。私たちは彼女の近くにある、優しい牧師さんのいる教会を紹介しました。

今年の1月、CLCからしだね書店が始まりました。定期刊行物の配達をするようになった私は、偶然、彼女を紹介した教会に行くことになりました。当時のままの優しい牧師さんから彼女の現在の様子を聞きました。

彼女は昨年、神様を信じ洗礼を受けました。欠かさず礼拝に来て、個人的に牧師と聖書を学ぶ機会をずっと続けているのだそうです。定期配達で届けた子ども向けの雑誌は「娘に読んであげたい」と、彼女が購読しているものでした。フルタイムで仕事も続けているそうです。工場で9時から17時まで「立ち仕事できついねん」と言いながら、もう3年も続けています。

そして…

からしだね館では、障害のある方の生活全般の相談を受けたり、就労支援をしたりしています。

あれほどまでに願っていた娘さんとの生活は、残念ながらまだ実現はしていないとのことでした。慣れた人たちのいる施設で暮らしたい、と娘さんが希望したためです。けれども、娘の施設のすぐそばに住んで、彼女はいつでも娘が

【古本の売上を含む CLC からしだね
書店の収益は、すべて、書店で働く
障がい者の工賃になります】

献本について お知らせ



【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本
(多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし(料理、健康、経済等)にかかわる本
- 5 小説(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町 75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店 献本係
電話：075-574-1001 FAX075-574-0025
Mail：clc@karashidane.or.jp

*たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。
書店への直接お持ち込みもありがたいです。

【本と一緒にいただきたいもの】

以下の内容を記入したメモ

- ①献本者のお名前
- ②ご住所
- ③お電話番号
- ④メールアドレス

⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィール、献本
いただいた本の感想や思い出等を一言。
⑥献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させ
ていただきたいと思います。
お名前の掲載は困るという方は、お知らせください。

書店だよりを通して、眠っている本の提供を呼び掛けたところ、続々と本が寄せられてきました。
その中に、ご自宅から高齢者施設に移られた方が、所属教会の牧師さんに託していかれた本1箱
がありました。書店員が箱の中を確認したところ、本の間から、20年ほど前の小さな女の子の
写真、ずいぶん昔に町の公会堂で催された超教派の伝道集会のちらし、短歌のメモの切れはし等
が出てきました。献本いただいた本の種類や行間の走り書き等も含めて、その方のお人柄や、大
切にされてきたこと、関心をもっておられたこと等の一端を見せていただいた思いでした。

「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわ
ざわい。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです」と聖書にあります。もっとも今は
100歳を超えて健やかにお暮らしの方もたくさんおられるのですが、いずれにせよ本は、私たち
の短い人生のあちこちで、私たちの生き方を励まし、変化を起こしてくれるものだと思います。
うれしい時、悲しいとき、苦しみの中にあるとき、喜びのなかにあるとき、誰にも相談できない
ような試練にあるとき、その人の神への信仰を支え、峠の道を伴走してくれた本たち。

思い入れのある本を託してくださったお気持ちを、次の読者につないでいけたらと思います。

出入りできるように暮らしています。

「自身のアイデンティティを築きなおすこと」

自分を愛してくれる親がいるのかいないのか、仕事はできるのかできないのか、病気が治るのか治らないのか、自
分は子どもの母親なのかそうでないのか、彼女の人生はいまどんな喪失でいっぱいでした。自分は一体何者なのか、
アイデンティティそのものを喪失したとも言えるでしょうか。そして、職業適性評価を受けたあの日、ものすごく痛
くて悲しい一日でしたが、その日は彼女がアイデンティティを新たに築きなおす一日だったと思うのです。

仕事をするには準備が必要な自分、病気がらくる症状によって、誰かにサポートをしてもらわないといけない自分、
施設にいる我が子を今は見守るしかできない自分。こうありたいと願う自分を手放すのはどんなにか、勇気と忍耐が
必要だったでしょう。

アイデンティティを築きなおした彼女は、上手に周囲の人に助けてもらう人になりました。周囲の人にうまく助け
てもらった彼女は、周囲の人にこぼれるような笑顔を見せるようになりました。そして口からはいつも「感謝」があふ
れているのだそうです。

「新しい希望」

彼女の喪失はまだ続いています。彼女の一番の願いは、娘さんと一緒に暮らすことでした。この願いはずっと実現し
ていません。そしてこれから実現するかはわかりません。けれども、この喪失のただ中で、彼女は仕事に就き、イエス
様を知り、確実に新しい希望を持つことができています。これほど大きな励ましはありません。

彼女のこのストーリーを通して、私は自分の喪失に対してもいろいろと思いつくしをしています。彼女のように、
喪失のただ中で、新しい希望をもつことのできる、そのようなしなやかな女性になりたいと願わされています。

障書S.U.V. 福祉S.U.V. 「うななうを聞くとみたら」とうななうがあれば、ぜひ、CLCからしだね
書店 (clc@karashidane.or.jp) までお知らせください。

◆あなたも「おすすめ本スポンサー」になってみませんか？

あなたのイチ押しの本を、店に置かせていただきます。

「この本、ぜひ皆さんに読んでほしい」というあなたのお勧め本。

6か月間店頭に置いてみませんか？

残念ながら売れ残ってしまったら、ご自分で買い取ってお友達にプレゼント
…という仕組みです。(書店に在庫をためこまず、皆さまの「推薦良書」を
広くご紹介いただける。…そうならいいなと思っています。)

ただし、本の選定や店内配置等については、当店にお任せください。種類に
よっては、ご希望に沿えない場合もあります。

編集後記

■ブックカフェの裏が殺風景で、なんとかもう
少し目に優しい空間を作りたいと思っていたの
ですが、手が回らず後回しになっていました。お
客様の中に「お手伝いしましょうか」と言ってくださ
る方があり、その方のすばらしいボランティア力に、とて
も助けられています。

「自宅にあったもの」や「ご近所からいただいたもの」とおっしゃるグリーン
や花を鉢植えにしてくださり、「できるだけ手のかからないものを植えました
が、枯れてしまったとしても、全然かまわないんですよ」とおっしゃいます。負担
をかけないようにというお心遣い、本当にありがたいことです。

■取次店から本が入荷されるのは、水曜日と金曜日の週2回です。お客様からの注文
のタイミングや、取次店にも在庫がない場合など、お取り寄せに1週間以上かかって
しまうこともあり、たいへん心苦しく思います。スピード感から言うと、巨大な市場
となっているアマゾンを利用した方が良いところを、キリスト教の良書が出版され続
け、キリスト教書店が町から消滅しないために、敢えて書店に申し込んでくださって
いる皆様のお気持ちとお祈りに支えられています。まだまだ不十分なところ、行き届
かないところが多く、日々反省だらけなのですが、書店もまた、皆さまのお気持ちに
応えられるように、がんばりたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル
〒607-8216 京都市山科区勸修寺東出町 75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 F A X 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp